

本賞 & 映像賞

“ドキュメンタリー”を突きつけた
2つの映像

木下 義則 徳田 憲亮 吉田 喜重

釜石市在住の木下義則カメラマンが津波に消えてゆく街を記録し、取材者、そして被災者としての心中を語ったコメントを加え、3.11 から2か月が過ぎた時点で放送された『幾歳経るとも要心あれー 2011.03.11. 東日本大震災ー』（IBC 岩手放送）、そして同じく釜石に住む徳田憲亮記者が津波の光景や避難する人々を撮影し、映像に映っていた人々のその後の現実を1年かけて追った『NHKスペシャル 38分間 巨大津波 いのちの記録』（NHK）の2作品が、本年度のテレビドキュメンタリー番組部門の本賞に決まった。二人には映像賞も贈られた。

吉田 例年であれば、この場で受賞されたお二人に、迷わず「おめでとうございます」と申し上げるのですが、そのような表現を使うことに今年はためられます。その理由は、作品のテーマが東日本大震災であったということ、そしてお二人が本当は目撃したくなかった光景を、カメラマンとして表現せざるを得なかった、その気持ちが痛烈に感じられるからです。

今年のドキュメンタリー作品の応募本数は、38回の放送文化基金賞の歴史の中でも最高の90本、その約2割が東日本大震災をテーマとした作品でした。

お二人の作品の共通点は、大震災当日の釜石の状況をカメラに納めていることですが、徳田さんから3月11日、津波に襲われる釜石の映像を撮るに至った経緯をお話ください。

レンズ越しに見た大津波

徳田 私は地震の発生時、海にほど近いNHK釜石報道室が入っている市営ビルにいました。3分ほどの大きな揺れのあと、まず、カメラをもって水門に向かって走り出しました。釜石の報道カメラマンなら、地震の後の水門が閉まる映像が、欲しいんです。でも、すでに水門は閉まってい

て…。大事なカットを撮り逃がしてしまった、と焦ってしまいました。あとは避難をする人を撮るしかない、とカメラを回していたら、高台の避難道路に上がっていました。津波を予測した行動ではありませんでした。

吉田 すでに水門が閉まっていたことが、徳田さんの命を助けたのかもしれませんが。高台の避難道路にはどのくらいの方がいましたか？その中には徳田さんのインタビューを受けた後、母親を助けるために自宅に戻り、そのまま行方不明になってしまった板澤さんもおられた。取材された時の様子をお話してください。

徳田 避難してきた方は、100人ぐらいだったでしょうか。普段より大きい地震だったので、地震の印象は聞いておこうかな、と思って声をかけました。板澤さんは、的確に地震の状況を話してくれましたので、とても印象に残っていました。その後も何人かインタビューしているときに、周りから「水が引いてるぞ!」と声が聞こえて、そこで初めて津波を意識しました。海に向かってカメラを構えた瞬間、海面がものすごい勢いで盛り上がってきて、もうあっという間に町の方に水が流れ込んできました。

私は、何か叫びながら、われを忘れて手当た

りしだいカメラを回していました。その時、正気に戻る瞬間がありました。カメラのファインダーに人が横切ったんです。もしかしたら、人が流されるところを撮ってしまうかもしれないと思うと同時に、ズームできなくなりました。怖かったです。

吉田 恐怖心から逃れるために、何か声を発することでご自身の気持ちを奮い立たせていたのでしょう。お二人の津波の映像を見て、危険が迫っているにもかかわらず、よく撮っていると思わずにはいられませんでした。おそらく茫然自失しながらカメラだけが回されていた。それがあの臨場感を生み出したのだと思います。それでは木下さんにもお話を伺います。

木下 私は、IBC 岩手放送の契約カメラマンとして3月11日までは、子ども達の行事などの地域の季節ネタを中心に取材していました。地震発生時は家にいたので、机の下にもぐった状態で、激しく揺れている様子を撮影しました。地震に備えて、大事なカメラは机の下においていました。揺れがおさまって、IBC 岩手放送の支社が入居する釜石港のそばにあるビルに向かいました。IBC の事務所は、ビルの3階にあり、ビル全体が津波避難ビルに指定されています。中に入ると機材も壊れ、電源も落ちていて映像は伝送できる状態ではありませんでした。ここから、私の記憶は少しあいまいなのです。部屋の外から「津波だ!」という声を聞いたような気がします。すぐ部屋のドアを開けて、避難階段の踊り場に出たら、誰かが「ほら!」と海を指差したのを覚えています。釜石には世界最大水深の防波堤があったんですが、カメラを構えてズームすると、そこを大波が乗り越えている様子が見えました。それが3時20分くらいでした。私は、これまで津波は大波がやって来ると思っていたんですが、そうではなく海面が膨れ上がるんです。たとえて言うなら、お風呂があふれるような感じで、防潮堤から町に黒いヘドロのような水があふれ出してきました。私は自分が撮った映像をまだちゃんと見ていないです。今でもこうしてお話をしても動悸がしてきて苦しくなってしまうことがあります。

吉田 木下さんが撮られた津波の映像は、私たちの想像をはるかに越えるものでした。津波がおさまった後も、逃げることもできたはずなのに、そのビルで一

夜を明かされている様子が映し出されていましたね。

木下 はい、大きな津波の押し引きが止まって、ビルが海の中に孤立したのが午後6時ぐらいだったでしょうか。ビルの中にいた男性12人で3階にある会社に避難しました。床はビシャビシャでした。その会社の方が「お土産でもらった饅頭があるよ。食うべ」といつて分けてくれたんです。甘いお饅頭を一口食べた瞬間、自分の中のスイッチが切れたような感覚に襲われました。極度の恐怖と緊張でがんじがらめになった体からふっと力が抜けました。他の人も同じ感覚だったみたいです。それから、皆口々に、自分が見た恐ろしい光景や会社の従業員の安否、そして家族のことなど今、心配していることを話し始めましたね。報道カメラマンとして、本来であればそういう場面こそしっかり記録すべきことだったのかもしれませんが、私は、できませんでした。そんな会話がふと途切れる瞬間があるんです。その時少し撮影したものを『幾歳経るとも要心あれ』の中で使いました。

その夜はとても静かで、サラサラと津波が引いていく音だけが小川のように響いていました。翌朝の日の出は本当に美しかったです。でも一旦、視線を陸に移すとそこは地獄でした。生活感や命の息吹というものが全く感じられない町がそこにありました。

いち早く釜石の惨状を伝えなくては

吉田 連絡手段が断ち切られている状況下で、どのようにして釜石の惨状を伝える映像を、テレビ局に届けられたのですか？

木下 家も心配でしたので、ハンディタイプのカメラで瓦礫の中をレポートしながら歩いて帰りました。津波の浸水域からはずれると、急にふだんのままの町が現れるんです。とにかく何か情報が欲しかったので、自宅近くの岩手県の出先機関に向かいました。そこには対策本部が設置されていて衛星電話もありましたが、マスコミには貸せないとのことでした。その時、「放送局の方ですか？」と声をかけられたんです。ドラッグストアの方でした。各店舗の店長判断で、食料品、医療品を無料で配布するように放送して欲しいと頼まれました。これは、人命救助に直結する話です。あらためて交渉し、衛星電話を3分間貸してもらえました。そこで、初めて局に



木下 義則 さん（きのした・よし のり）

岩手県釜石市出身。プロのロックドラマー、仙台でFM局のディレクターを経て、1992年釜石のCATV局で番組制作を担当。2005年、独自で映像撮影、制作業務を行い、10年よりIBC岩手放送の報道契約カメラマンとなる。現在は、三陸沿岸の被災地での取材活動の他、得意の音楽を活かしたボランティア活動に精力的に取り組む。

私が生きていることが伝えられ、無事映像を手渡すことができました。大震災の次の日でした。

徳田 私は、避難道路から市役所に行けましたので、そちらへ向かいました。電気は落ちている、情報は全く入ってこない中で、役所の方々は、懸命に自らの地域を守ろうと働いていました。空腹は感じませんでしたが、乾パンや飲み物が配られました。外では、木材を拾ってきて、暖を取りながら、地震直後の生々しい体験を話したりしていました。僕も木下さんと一緒に、そんなお話は取材できなかったです。職業意識としては、これは記録すべきだと思ったりするんですが、そこに住んでいる者としてブレーキがかかるのかな、いや、他県から来たカメラマンでも同じような心境になるかもしれません。そのときはそんな葛藤に自分自身少し参っていました。

でも撮った釜石の映像は、早く局に送り込みたいと思っていました。明日、水が汚れた場所を通って駅までいけば何とかなるんじゃないか、と見通しをつけられたら少し安心できて、市役所の隅で寝ました。翌朝駅でタクシーを見つけて、盛岡へビデオを届けてもらいました。そこで、私が無事だということが盛岡放送局に伝わりました。

吉田 お二人の映像は同じ頃にテレビ局に届けられ、日本にかぎらず、世界のメディアにも一斉に流されました。



徳田 憲亮 さん（とくだ・のりあき）

大分県別府市出身。1988年岩手大学入学のため、別府から盛岡へ移住。1994年NHK盛岡放送局へ報道スタッフとして勤務。震災の4か月前の2010年10月からNHK釜石報道室へ記者・カメラマンとして赴任。

これからはドキュメンタリー作品としての『幾歳経るとも要心あれ』と『38分間』について、お話ししたいと思います。『幾歳経るとも要心あれ』は震災から2か月半経った5月に、そして『38分間』は1年経った今年の3月に放送されています。これらの作品の核となるものは、お二人が偶然撮った映像と生の音声、つまりあの現場に居合わせたという、誰しもが圧倒される存在感です。

38年という放送文化基金賞の長い歴史の中で、ドキュメンタリーでは今回初めて2作品に本賞を差し上げることになりました。誤解を恐れずにいえば、従来のドキュメンタリーはフィクションの延長上にあった。作品には演出家の意図、カメラマンの感覚が大きく影響します。さらにドラマチックに編集し、ナレーションを入れたりするのですが、それはドキュメンタリーといっても劇映画と同じ表現方法であり、フィクションと同じなのです。しかし、この2作品はそれを許さない。私たちは、現実そのものを見るしかない。それを作品として評価の対象とすることは、誰にもできない。それがこの2作品に、平等に賞を上げた理由であり、審査した私たちの偽らざる気持です。両方とも良かったというレベルを超えた、いっさいの評価を拒絶する映像だったのです。日本のテレビドキュ



吉田 喜重 さん（よしだ・よししげ）

テレビドキュメンタリー番組審査委員長

メンタリーの歴史、そして映画をも含めて、ドキュメンタリーとは何であるかを私たちに突きつけた、初めての画期的な瞬間だったと思います。

お二人はこれからも 3.11 の映像を背負いながら、いわばその宿命とともに、これからも仕事されることと思います。

徳田さんの場合も、津波を撮影してしまった“あの日”から 1 年間の取材を経て『38 分間』が制作されました。そのあいだに何か気持ちの変化はありますか？

“あの日” から 1 年半経って今思うこと

徳田 震災直後は、家族を亡くされた方への取材は、避けていました。お話を聞くことがとてもつらくて、自分自身耐えられなくなるのがわかっていましたからです。ですから、震災後は“仮設が建てられた”などの新たに始まる取材を意識的に行っていました。そんな時に、『38 分間』のプロデューサーから、「貴方が避難道路でインタビューした人を探し出して、取材している」と聞き、その時初めて、板澤さんが亡くなられていることを知りました。ショックを受けたと同時に、私があの時インタビューしなかったら、板澤さんとお母さんは早く避難できて、助かったのではないかと、という思いにとり憑かれてしまいました。何かに熱中していても、時折、お腹の奥でチクチク痛み出すような罪悪感があるんです。そのうち板澤さんだけでなく、カメラに映っていた人や、そして津波を撮影したこと

そのものにも後ろめたさを感じていることに気づきました。これからは釜石で、この仕事をやるなら、この様な気持ちに決着を付けておかないといけないと思い、『38 分間』の取材チームに合流しました。でも、罪悪感や後ろめたさから逃れることは無理でした。あの様な大変な場面で、人を助けられるわけでもなく、人々の様子を撮っている行為というのはどこか罪深いことなのだと思身に染みしました。ならば、最大限取材させてもらう人にはきちんと向き合おう、真摯に仕事をしようと思っています。当たり前のことなのですが、今はそれしかない。

木下 私の撮った映像が、これから時代の変遷の中で、どんな意味や意義を持つのか、それがどう変化していくのか、これは予測が付きません。でも間違いなくなんらかの意味を帯びて歴史の中に残っていくのだろうとは思っています。私は取材者であると同時に、釜石で生まれ、育って今も暮らしている釜石の人間ですので、そのふるさとがそのような様になっていく。まさにその瞬間の映像を残さなくてはいけないことは、正直申し上げて辛いです。けれども釜石の仲間、友人、お世話になった方々の「よく撮ってくれた、お前は釜石の歴史の中の重要な一步を記録したんだ」と言ってくれる声に励まされて、今ここにいることができます。ただあの津波で大切な友人を亡くしましたし、自分が撮った映像には、とても言葉では言い表せない思いがあります。

吉田 最後にお二人がお話しされたのは、やはり震災で亡くなられた方たちのことでした。多くの震災関係の番組では、津波の映像を見て、「残酷で、気分が悪くなられましたら、ご覧にならないでください」と、キャスターが呼びかけたりしていましたが、私自身は、そうした呼びかけに強い違和感を抱かざるを得ませんでした。報道する立場からすれば、亡くなった方たちも、そしてこうして生きている人間も、ともに平等な事実であり、その映像を見る、見ないについては、視聴者の判断に委ねるべきです。

今日は、お二人に辛い体験を思い起こさせてしまったことを、謝罪したいと思います。そして今日のお話を、貴重な記録として残しておくことをお許してください。